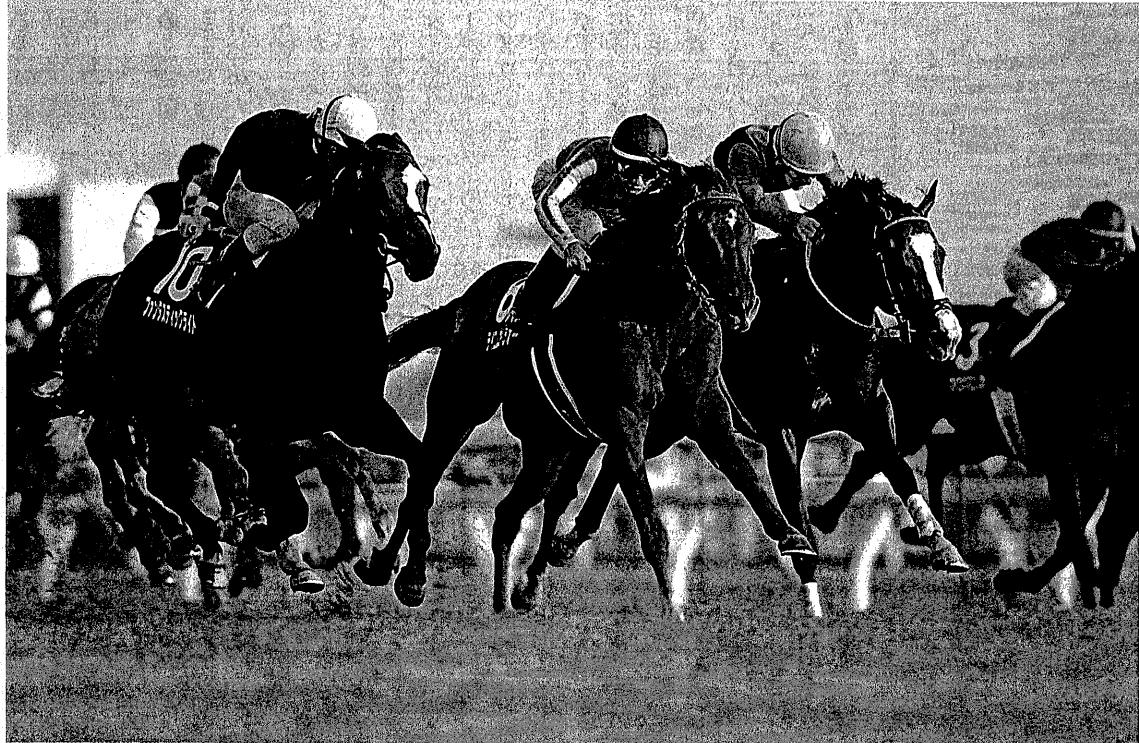


THE 2000 JPN CLASSIFICATIONS



JRAハンデキャッパー(10名)

甲佐 勇 田辺清一 牧村憲治

古橋 明 大田康二 久保 厚

西田 研 又野一仁

蛇名哲士 高木辰夫

NARレーティング担当者(3名)

杉本篤信

秋元稔弥

相川貴志

国際GⅠのジャパンCは、ティエムオペラオーが競り合いを制し、国内外の強豪を蹴散らした

M.Watabe

2000 JPNクラシフィケーション決定!

毎

年誌上で前年度のクラシフィケーションを紹介しているが、年々着実な

進歩を見せるものとして「競馬の国際化」がある。我が国では、初のダート国際競走となる「ジャパンカップ・ダート」が創設され、これまで芝部門に限られていた日本調教馬の国際レーティングが、

ダート部門も対象として国際会議で議論されることになった。競馬の国際化は、

単に日本馬の海外遠征や新たな国際競走の創設といった、我が国を視点にした環境の変化にとどまらず、香港国際競走におけるレース・グレードの向上やシンガ

ポールの国際競走創設などに見られるよう、全世界的な動きとして実感されるのである。

現在、いわゆる競馬先進国の中には「インターナショナル・クラシフィケーション」が存在し、JRAもその構成メンバーの一員であるが、先般開催されたインターナショナル・クラシフィケーション会議において2001年以降の同会議にアラブ首長国連邦(UAE)をメンバーに加えることが承認された。このことは、UAE調教馬がクラシフィケーションの中で占めるステータスからして当然であるとも言えるし、エミレーツ・ワールドシリーズのように競走体系が国境を越え、大陸を越える今日の環境に「インターナショナル・クラシフィケーション」そのものが、より緻密な検証と議論が必要としていることを物語っている。加えて、

近年香港やオーストラリアを中心としてアジア・オセアニアのクラシフィケーションが整合され、眞の「インターナショナル・クラシフィケーション」に生まれ変わる日が来るのかも知れない。

2000年のインターナショナル・クラシフィケーション会議は、12月6日から11日までドイツのハノーバーで開催

され、イギリス、アイルランド、フランス、ドイツ、イタリア、米国および日本を代表するハンデキャッパーが参集(香港、UAE、カナダ、オーストラリア、南アフリカの5カ国がオブザーバー参加)して協議、110ポンド以上にランクされる馬のレーティングについて検証し、各馬のレートが決定された。

今季最高のレートはドバイミレニアムのI(Intermediate)134ポンド。当時北米最強といわれたベーレンズを馬なりで6馬身突き放したドバイ・ワールドカップ、芝でも8馬身差の圧勝劇を演じて見せたプリンスオブウェールズSと、芝ダートを問わぬ傑出したパフォーマンスを示した同馬は、ドバイ・ワールドカップの134というレートでリーディングとなつた。同馬の数値はクラシフィケーション全体のリーディングであるだけに多くの時間が議論に割かれたが、ベーレンズの評価を124ポンド、着差を10ポンドと算定することによって決した。但し、ベーレンズについてはその後の北米における成績が低調であり、クラシフィケーション・レートは121に修正されることとなる。

昨年の最強馬モンジューは、凱旋門賞で惨敗するまで栄勝を続け、いずれも持つたままの勝ちっぷりに、昨年以上の能力を感じ取ったハンデキャッパーも少なくなかつたが、凱旋門賞以降は復活劇もなく、やや評価を下げる事となつた。彼のレートは、キングジョージでの栄勝を評価しての130ポンド。これは、芝のL(Long)コラムでのリーディングで

ある。他の距離コラムでは、S (Sprint) がアベイユドロンシャン賞勝ち馬のナミドで127ポンド、M (Mile) はムータティール、ダンジリ、インディアンロッジの3頭が同評価の123ポンド、I (Intermediate) は前述のドバイミニアムを除くとカラニシの126ポンド、E (Extended) が前年同様アスコットゴールドカップ優勝カイフタラの122ポンドで各距離別のリーディングを占めた。

古馬ダートでは、S (Sprint) がブリーダーズカップ・スプリント勝ちのコナゴルドで127ポンド、M (Mile) がレモンドロップキッドとリボレッタの2頭でいずれも125ポンド、I (Intermediate) がドバイミニアムで、それぞれのリーディングとなつた。

主要競走の評価では、昨年同様に凱旋門賞とジャパンカップに多くの時間が当てられた。凱旋門賞では、今季の4歳リーディングが疑いなしシャンダードのレートと、強力な布陣で欧洲競馬を盛り上げた4歳牝馬勢の位置づけが直接に絡み、議論は彼のパフォーマンスを如何に評価するかに要約される。また、それまでのレースでも安定したレートを示しているエラアシーナについても指標とされた。ファンタスティックライトについて、比亚スティックライトであつた。議論は彼のパフォーマンスを如何に評価するかに要約される。また、それまでのレ

ースでも安定したレートを示しているエラアシーナについても指標とされた。ファンタスティックライトについて、比亚スティックライトであつた。議論は彼のパフォーマンスを如何に評価するかに要約される。また、それまでのレースでも安定したレートを示しているエラアシーナについても指標とされた。ファンタスティックライトについて、比亚スティックライトであつた。議論は彼のパフォーマンスを如何に評価するかに要約される。また、それまでのレ

一方、ジャパンカップである。出走馬のうち、一定の能力を發揮し、かつレーティングの尺度となり得る客観性の高いプレ・レートを持つ馬は、まずファンタスティックライトであつた。議論は彼のパフォーマンスを如何に評価するかに要約される。また、それまでのレ

ースでも安定したレートを示しているエラアシーナについても指標とされた。ファンタスティックライトについて、比亚スティックライトであつた。議論は彼のパフォーマンスを如何に評価するかに要約される。また、それまでのレ

一方、ジャパンカップである。出走馬のうち、一定の能力を發揮し、かつレーティングの尺度となり得る客観性の高いプレ・レートを持つ馬は、まずファンタスティックライトであつた。議論は彼のパフォーマンスを如何に評価するかに要約される。また、それまでのレ

一方、ジャパンカップである。出走馬のうち、一定の能力を發揮し、かつレーティングの尺度となり得る客観性の高いプレ・レートを持つ馬は、まずファンタスティックライトであつた。議論は彼のパフォーマンスを如何に評価するかに要約される。また、それまでのレ

一方、ジャパンカップである。出走馬のうち、一定の能力を發揮し、かつレーティングの尺度となり得る客観性の高いプレ・レートを持つ馬は、まずファンタスティックライトであつた。議論は彼のパフォーマンスを如何に評価するかに要約される。また、それまでのレ

一方、ジャパンカップである。出走馬のうち、一定の能力を發揮し、かつレーティングの尺度となり得る客観性の高いプレ・レートを持つ馬は、まずファンタスティックライトであつた。議論は彼のパフォーマンスを如何に評価するかに要約される。また、それまでのレ

JPNクラシフィケーション

(1) 対象馬

JRAの競走、ダート・グレード競走および海外の重賞競走に出走した日本調教馬で100ポンド以上の評価を得た馬、および日本の国際競走に出走した馬

(2) 年齢区分

3歳、4歳、5歳以上の3区分 (芝・ダート別)

(3) 距離区分

S (1000~1400未満) Sprint

M (1400~1900未満) Mile

I (1900~2200未満) Intermediate

L (2200~2800未満) Long

E (2800~) Extended

* 但し、3歳については距離区分をしない。

(4) 評価単位 ポンド (キログラム併記) * 1ポンド=0.453kg

レーティングとクラシフィケーション

レーティングとは「位置づけ」、クラシフィケーションとは「格付け」の意味。似たような意味合いで、個々の馬が個々の競走で示したパフォーマンスを指す評価したものがレーティングであり、年度毎に比較される各馬の能力評価の中で最終的に距離別に格付けする作業およびその結果をクラシフィケーションとよぶ。レーティングの集合体がクラシフィケーションであるといつてもよい。

一方、ジャパンカップである。出走馬のうち、一定の能力を發揮し、かつレーティングの尺度となり得る客観性の高いプレ・レートを持つ馬は、まずファンタスティックライトであつた。議論は彼のパフォーマンスを如何に評価するかに要約される。また、それまでのレ

一方、ジャパンカップである。出走馬のうち、一定の能力を發揮し、かつレーティングの尺度となり得る客観性の高いプレ・レートを持つ馬は、まずファンタスティックライトであつた。議論は彼のパフォーマンスを如何に評価するかに要約される。また、それまでのレ

一方、ジャパンカップである。出走馬のうち、一定の能力を發揮し、かつレーティングの尺度となり得る客観性の高いプレ・レートを持つ馬は、まずファンタスティックライトであつた。議論は彼のパフォーマンスを如何に評価するかに要約される。また、それまでのレ

ことだ。

THE 2000 JPN CLASSIFICATIONS

3ポンドの評価で、3着を0・6秒離したことに加え、ラムタラ産駒でイシノサンデーの弟という血統からも今後の活躍が期待されるところだろう。

4歳芝

ダービーでのパフォーマンスを評価

三強が中心となつて好勝負を繰り広げた99年に對し、昨年の4歳牡馬戦線はアグネスフライとエアシャカールの2頭が活躍した。ただし、3歳の段階から指摘されていた、全体的にレベルが低い世代との印象は変わらず、特に秋のジャパンカップでは牝馬をふくめ4歳G.I勢が揃つて惨敗するという結果に終わつている。

そんななか、昨年の4歳トップの座に輝いたのがダービー馬のアグネスフライ。父はサンデーサイレンス、母は桜花賞馬のアグネスフローラという血統背景もあり、春のダービーでは前年のアドマイヤベガを1ボイント上回る評価を得た。しかし秋になると菊花賞、ジャパンカップと凡走続きでダービーを上回るパフォーマンスを發揮することはできなかつた。また、同馬の116ポンドというレーティングは、99年のティエムオペラオー119ポンド、98年のエルコンドルバサ126ポンド、スペシャルウイーク121ポンド、97年のシルクジャステイス120ポンドと比較しても低調。つまり、古馬相手に好走できず、同世代同士の実績だけではレーティングはあまりあがらないということである。

そして次は皐月賞と菊花賞を制し、ダービーではハナ差の2着と惜しくも三冠をのがしたエアシャカールが115ポンドの評価となつた。JRA賞ではアグネ

スフライトに大差をつけて最優秀4歳牡馬に輝いたが、クラシフィケーションでは反対に1ポンド下の評価にとどまつたのだ。これはなぜかと言えば、レーティングはある競走で示したパフォーマンスを指數化したものなので、競走ごとに計算されるものではなく、タイトル数とか勝利数などと無関係であるためだ。昨年についていえば、最高のパフォーマンスと認められた4歳戦がダービーであり、その勝ち馬が最も高いレートを占めたといふことである。

また、菊花賞にはそのトライアルであるセントライト記念、神戸新聞杯の勝者が姿をみせておらず、新興勢力の台頭がなかつたこともレースの評価があがらなかつた理由としてあげられた。実際、2着のトーホウシデンをはじめ首位馬の多くが春のクラシック参戦馬で、その再戦模様だった感は否めない。しかもエアシャカールは果敢にキングジョージに挑戦したことも評価されたが、ジャパンカップでは14着と惨敗。ダービーの115ポンドが最高という評価が妥当だらうといふ結論が下された。

一方、4歳馬が古馬相手に苦戦を続けるなか、唯1頭、古馬混合G.I制覇をマイルCSで遂げたアグネスデジタルも15ポンドの評価だつた。前年の3歳ダート部門でトップ評価を受けており、春のNHKマイルカップでは7着と敗れて



4歳芝部門のトップはアグネスフライ。ダービーでのパフォーマンスが評価された
K. Yamamoto

が期待されるところだろう。

スフライトに大差をつけて最優秀4歳牡馬に輝いたが、クラシフィケーションでは反対に1ポンド下の評価にとどまつたのだ。これはなぜかと言えば、レーティングはある競走で示したパフォーマンスを指數化したものなので、競走ごとに計算されるものではなく、タイトル数とか勝利数などと無関係であるためだ。昨年についていえば、最高のパフォーマンスと認められた4歳戦がダービーであり、その勝ち馬が最も高いレートを占めたといふことである。

また、菊花賞にはそのトライアルであるセントライト記念、神戸新聞杯の勝者が姿をみせておらず、新興勢力の台頭がなかつたこともレースの評価があがらなかつた理由としてあげられた。実際、2着のトーホウシデンをはじめ首位馬の多くが春のクラシック参戦馬で、その再戦模様だった感は否めない。しかもエアシャカールは果敢にキングジョージに挑戦したことも評価されたが、ジャパンカップでは14着と惨敗。ダービーの115ポンドが最高という評価が妥当だらうといふ結論が下された。

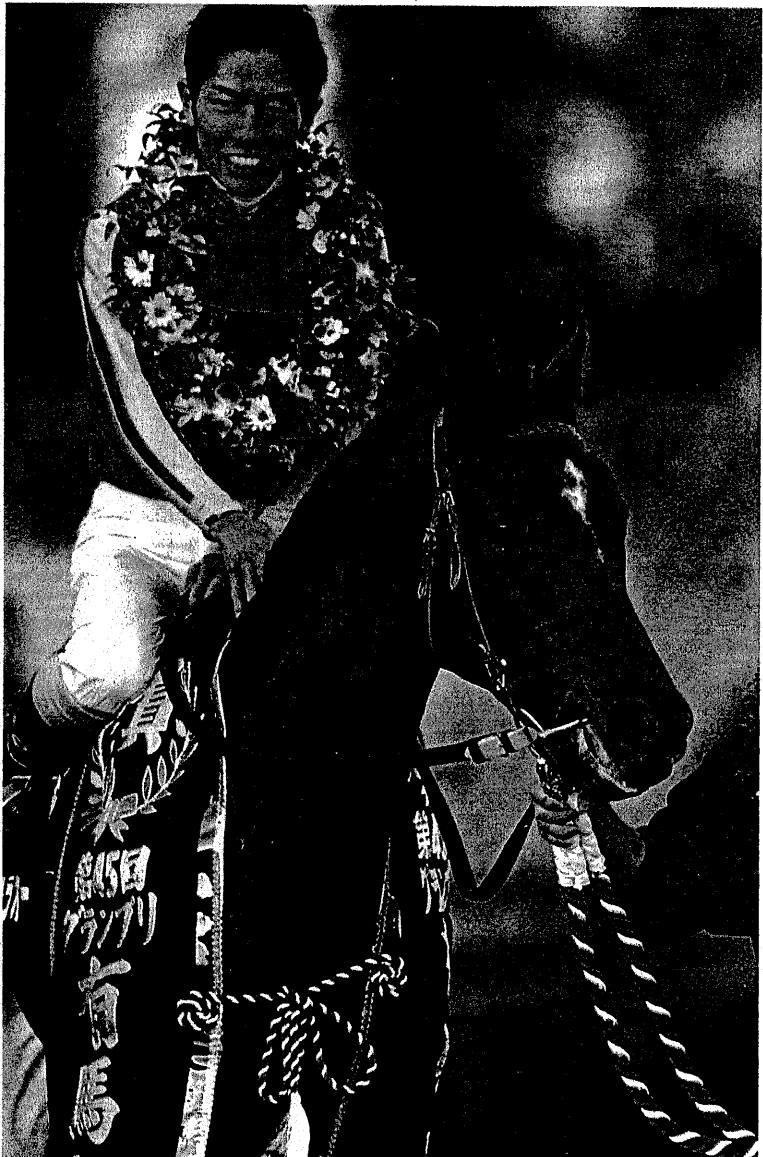
一方、4歳馬が古馬相手に苦戦を続けるなか、唯1頭、古馬混合G.I制覇をマイルCSで遂げたアグネスデジタルも15ポンドの評価だつた。前年の3歳ダート部門でトップ評価を受けており、春のNHKマイルカップでは7着と敗れて

いることから芝では力量不足と思われていたが、マイルCSでは直線ごぼう抜きの快勝を演じMコラムの首位にたつた。さらに、統いてはダイタクリーヴァとアドマイヤボスが114ポンドで並ぶ。前者はマイルCSで惜しくも優勝を逃したものの、春の皐月賞2着の実績に加えて古馬混合の鳴尾記念も制しており、M・I区分での今年の活躍がおおいに期待される1頭である。また、後者のアドマイヤボスは夏以降に力をつけてきた数少ない上り馬の筆頭で、わずか2戦のキャリアでセントライト記念を制覇。そして暮れの有馬記念では4歳世代で最先着となる5着入着を果たした。まだ底をみせておらず、今年の中・長距離戦線での注目株といえるだろう。また、その他ではSコラムのトップにエーワフルコンが。

一方、4歳馬が古馬相手に苦戦を続けるなか、唯1頭、古馬混合G.I制覇をマイルCSで遂げたアグネスデジタルも15ポンドの評価だつた。前年の3歳ダート部門でトップ評価を受けており、春のNHKマイルカップでは7着と敗れて

いることから芝では力量不足と思われていたが、マイルCSでは直線ごぼう抜きの快勝を演じMコラムの首位にたつた。さらに、統いてはダイタクリーヴァとアドマイヤボスが114ポンドで並ぶ。前者はマイルCSで惜しくも優勝を逃したものの、春の皐月賞2着の実績に加えて古馬混合の鳴尾記念も制しており、M・I区分での今年の活躍がおおいに期待される1頭である。そしてこのチアズグレイスに加え、桜花賞2着のマヤノメイビー、秋華賞2着のヤマカツスズランといった面々が前年の阪神3歳牝馬Sの上位馬。高い評価を受けた阪神3歳牝馬S組が、翌年も牝馬戦線の主力となる結果であった。かたや、秋になって台頭してきたのがテイコティコタックで、春の両G.I馬よりも1ポンド下の108ポンド。これは勝った秋華賞の評価による。そして同馬はその後に阪神牝馬特別で3着と善戦したが、これが4歳牝馬の芝路線での数少ない古馬混合戦的好走例となつた。99年に古馬相手の天皇賞・秋に挑戦し4着と健闘したステインガーのようだ馬は現れず、110ポンド以上の高評価を得た馬が1頭もないことから、例年と比べると健闘なレベルだつたとの意見も漏れた。つまり、4歳の芝戦線では牡馬、牝馬とも秋になって古馬の壁に阻まれた馬が多かつた。M・I区分では古馬に通用するところをみせたが、L区分では苦戦を呈し、今年はさらなる奮起が必要だらう。

THE 2000 JPN CLASSIFICATIONS



5歳芝部門はティエムオペラオーが文句なしのトップだが、122ポンドにとどまった

M. Yamada

2着と健闘。ダービークラシックの圧勝劇がフロックでも、相手に恵まれたものでもなかつたことを証明した。

そして次位には、芝のマイルでもトップランクを得たアグネスデジタルがユニコーンSの勝利と、古馬相手の武藏野S2着によつて108ポンドのレーティングとなつた。また、牝馬で唯一ランクインしたのが、はじめての4歳牝馬のダートグレード競走である関東オーフィスを制したブリエミネンス。まだまだ層の薄い牝馬にあつて、新設されたジャパンカップダートでも4歳最先着となる4着と健闘し、今後の活躍が期待されるところである。

そしてこの前述の3頭に加え、マイネルブライアン(シリウスS1着)、マチカネラブなど、馬券的価値の高い馬が、その実力で上位に位置づけられ、GI競走を勝つことなく、そのシンザンでさえ中山のオープンで1度の敗戦を喫していることを考えれば、GI5勝を

ネラン(武藏野S、シリウスSとともに3着)、ノボジヤック(根岸S3着)らがお

り、4歳ダート戦線の顔ぶれは比較的豊富だったといえるだろう。

以上
5歳芝

122ポンドの評価

ティエムオペラオーがトップも

2000年の話題はティエムオペラオーに尽きるといつていいだろう。5つのGIすべてを制した馬は、昨年で20回目を迎えたジャパンカップ創設以来はじめてのことであり、このような記録はシンザンの5歳時の年間8戦7勝にまで遡らなければ匹敵するものではなく、そのシンザンでさえ中山のオープンで1度の敗戦を喫していることを考えれば、GI5勝を

ふくむ8戦全勝は空前絶後の大記録と称しても問題はないはずだ。とりわけジャパンカップを含む秋の三冠は、初のボーナス獲得であつたように非常に価値の高いものと思われる。

ところが、そんなティエムオペラオーのレーティングは冒頭にも記されたように122ポンド。かつて低い数値ではないとはいいうものの、彼の圧倒的な強さを1年間にわたり体感し続けた多くの読

者にとつては物足りなさを感じる数値ではなかろうか。なぜ、ジャパンカップで先着したファンタスティックライトよりも低い評価なのか。あるいは、同様の臨

戦過程を辿り、年間GI3勝に終わつたスペシャルウイナーに1ポンドおよばなかつたのか。

だがそれらの疑問も、4歳芝のコラムで紹介したように、レーティングはレス・パフォーマンスの評価によるもので、記録の積み重ねで加算されるようなポイントではないということを理解する必要がある。種別の中では同じようなメンバーで、同じような勝ち方をしていればレーティングはほぼ同じ数値であるはずだから。ティエムオペラオーのレーティングについては巻頭のクラシフィケーション紹介で述べているので、ここでは繰り返さない。ただ、欧州でも近年のラムタラが、いずれも僅差勝ちであつたために高いレーティングは得られなかつたこと、かつてのシンザンもおそらく高いレーティングの付く馬ではなかつただろうといつたことも話題とされたことを紹介しておこう。

また、122ポンドというレーティングは、スペシャルウイナー・グラスワンダーの123ポンドに及ばないが、サイレンスズカ、タイキシャトルと同等の数値である。高い低いはおそらく読者の主觀によつても異なるものと思われるが、直接対決をしていない世代別の比較は難しいかも知れない。ハンデキャップパートウが次点に。歴史的な名馬を前に、結果的に

そして、I・L・Eの3コラム独占という完璧な戦績を誇ったティエムオペラオーを、もつとも脅かしたマイショウウドトウが次点に。歴史的な名馬を前に、結果的に

